

文化大革命期における「二月逆流」に 関する一考察

日吉秀松

はじめ

1966年5月16日、毛沢東によって「文化大革命」（以下、文革と略称）が発動された。従来の体制や秩序を破壊することを目標とした文革の展開にともない、紅衛兵（主に学生）や造反派（主に労働者）はこの政治運動に深く巻き込まれ、文革初期における毛沢東の諸目的に沿って動いていた。その中で「奪権」は当時における核心的な行動であった。その行動は毛沢東と「中共中央文化革命小組」（以下、文革小組と略称）の下に展開されていた。

中共上層部は、大まかに「党務」、「国務」そして「軍務」といった三つの系統に分けることができる。つまり、劉少奇をはじめとする「党務」系統、周恩来をはじめとする「国務」系統、林彪をはじめとする「軍務」系統である。この三つの系統は、毛沢東の指導下に置かれていて、それぞれが完全に独立的に運営されていたのではなく、お互いに交錯しているのが現状であった。たとえば、中共中央軍事委員会（以下、軍事委員会と略称）副主席陳毅が外交部長を、軍事委員会秘書長羅瑞卿が中央書記処書記を務めたことなどである。

「文革」が発動される前後に毛沢東は「党務」系統に対する粛清を行い、そして、「文革小組」が「党務」系統に取って替わった。「文革小組」は1966年5月に成立し、毛沢東の元秘書陳伯達と毛沢東の妻江青がそれぞれ組長と副組長に就任していた。江青が実質的に実権を握り、さらに、軍の文革小組の顧問を兼任していた。そのため、江青をはじめとする「文革小組」は「党務」系統を掌握するのみならず、「軍務」系統にも介入するようになった。

「軍務」系統の中心となるのが軍事委員会である。文革初期の1967年8月に軍事委員会に取って代わって、従来の軍事委員会の日常業務を取り扱うようになったのは軍事弁事小組である。

既存の諸系統に強い不信感を持っていた毛沢東はかつて身边的人に「中国共産党内では、いい人がすでに死んだ。残りは生ける屍ばかりだ」²⁾と愚痴をこぼしたことがある。このため、文革初期、毛沢東は権力を奪い取る、いわゆる「奪権」を呼びかけた。また、毛沢東には既存の軍隊以外に第二の武装力を結成する考えもあったといわれている¹⁾。このことから、1967年1月から全国各地で「奪権」の嵐が起こった。

その「奪権」によって、各地方の指導者が次々に失脚させられ、さまざまな混乱が生じた。それに対して、一部中央の高級幹部の不満がさらに高まり、ついに、1967年2月16日にそれら的高級幹部による「文革小組」を厳しく糾弾することが起きた。毛沢東はそのことを「二月逆流」だと批判し、反文革であると断罪した。そして、2月22日から3月18日までに、前後7回にわたり会議を開き、それら高級幹部たちへの批判をエスカレートさせた。

それに関して、今までの研究では、高級幹部たちが「文革小組」に反対したことが「二月逆流」の原因であるとしているが、それは、表面的な捉え方に過ぎない。また、毛沢東の談話³⁾をそのまま踏襲して、「二月逆流」の起因が、林彪などに反対したことにあるという結論もある。しかし、この結論は明らかに事実と反している。

本報告では、「二月逆流」に至るプロセスを分析したうえで、その真因を明らかにし、そして、「二月逆流」事件をめぐる、周恩来の態度についても検証する。

一、「奪権」に関する毛沢東の動き

1966年12月26日、毛沢東は中南海にある自宅で誕生日会を開き、その場に居合わせた人たち（陳伯達、張春橋、王力、閔鋒、戚本禹、姚文元）に、「全国全面的階級闘争のため、乾杯！」と毛沢東が音頭をとった⁴⁾。中共機関紙『人民日報』と機関誌『紅旗』の1967年元旦の共同社説「プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめよう」には、1967年は「全国的に全面的な階級闘争が繰り上げられる年となるだろう……プロレタリア階級がその他の革命的な大衆と団結して、資本主義の道を歩む党内の一握りの実権派と妖怪変化に対して総攻撃を繰り広げる年となるだろう」⁵⁾という毛沢東の考えが反映されている。それに応じたかのように上海では「下から上への奪権」というスローガンが掲げられた。1月13日に陳伯達は、「監督は良いが、奪権してはならない」と上海のスローガンに異論を唱え、さらに、「上海の奪権はブルジョア階級的反動路線のニュースタイルだ」と厳しく非難した。ところが、毛沢東は陳伯達の批判を一蹴し、上海のスローガンを支持した⁶⁾。それだけではなく、毛沢東はわざわざ、陳伯達を批判する会議を開き、上海の「奪権」行動を支持する長い談話をしていた。その会議に参加した王力と閔鋒は毛沢東の談話内容に基づき、「プロレタリア革命派は連合せよ！」という文章を中共中央機関誌『紅旗』の評論員名義で1月15日に同誌に掲載した。同文章に対して毛沢東が「よくまとめた、そのまま発表しなさい」と高く評価していた。当日の夜、ラジオを通じて同文章を放送し、さらに、翌日、中共中央機関紙『人民日報』もトップ記事として掲載した⁷⁾。同文章では、「党内の資本主義の道を歩む実権派は、ただ一握りであるが、地方政府及び諸機関・団体を占拠しており、いまだに党、政府、財政の一部権力を掌握し、それらの権力を利用して、群衆を迫害し、プロレタリア文化大革命を破壊する。……我々の党内の一握りの資本主義の道を歩む実権派との戦いにおいて、最も根本的なことは、彼らの手中から権力を奪い取ることである。彼らの権力を奪い取り、彼らを圧迫することにより、彼らを潰えることができる。毛主席の教えに従い、党内の一握りの資本主

義の道を歩む実権派から権力を奪い取ることは、プロレタリア独裁の前提の下に一つの階級がもう一つの階級を覆す革命であり、とりもなおさず、プロレタリアがブルジョアを消滅させる革命である。……偉大な統帥毛主席の指導下で、プロレタリア革命派は団結して、広範な大衆と手を組んで、全国的な階級闘争を展開せよ」⁸⁾と毛沢東の意向を述べている。したがって、同文章は毛沢東の「奪権」宣言書であると言っても過言ではない⁹⁾。さらに、2月3日、『紅旗』第3期は「プロレタリア革命派の奪権闘争について」と題した社説を発表した。社説では既存の国家体制を打ち砕き、新しい体制が旧体制に取って替わることが最も強調されている¹⁰⁾。この社説は文革が全面奪権の「新段階」に進むための綱領的文書とされた。それ故、各地の「奪権」は、完全に毛沢東の意志に則した行動と言える。ほぼ同日、「(毛)主席は自ら主催する小範囲の常務委員会拡大会議で、『現在は文革小組が書記処に取って替わった』と強調した」¹¹⁾。こうして、その日から「文革小組」が中共の中枢機関となった。

二、上海の「奪権」

このような背景の下に、地方では、革命造反派によって「奪権」(権力を奪取する)の動きが加速し、諸地域の主要な指導者の権力が革命造反派に奪われ、とりわけ、上海の「一月革命」¹²⁾という「奪権」が毛沢東によって模範的地域とされた。実際のところは、上海の「奪権」は、他の地域よりも遅れ、しかも、上海の「奪権」に成功したのは1967年2月5日であった¹³⁾。この日、パリコミュンに倣って、「上海人民公社」が成立し、「一月革命勝利万歳」という「上海人民公社の宣言」を発表した。宣言では、「偉大な一月革命の嵐のなかで、旧上海市委員会、市人民委員会¹⁴⁾は我々に取り壊され、上海人民公社が誕生した」¹⁵⁾と強調された。

しかし、なぜ、他の地域より出遅れた上海の「奪権」行動が「一月革命」の模範として大いに宣伝されたのか。それは、上海という地域の特殊性や毛沢東の政治的な思惑と関連していると考えられる。理由として、まず、上海は中国において産業労働者が最も集中する地域であり、各地域への影響力を有していることである。第二に、上海は文革の号令を発する地域であり、文革の発祥地であると言っても過言ではない。第三に、文革の発動や展開に大きく貢献した張春橋、姚文元などが上海地域の幹部であり、文革小組の主要なメンバーでもある。このように上海の「奪権」行動を模範にすることによって、「文革小組」の権威や地位を高めさせようとしたと考えられる。実際のところ、その動きはそれ以前からすでに始まっていた。1月11日、中央が上海の32の造反組織に送る祝電の内容について討論され、その場で周恩来が毛沢東に意見を求めた。それに対して毛沢東が「中共中央、国務院、中央軍事委員会に中央文革小組を加え、四機関の連名で送ると指示した」¹⁶⁾。わざと「文革小組」を党、軍事、政府の最高機関と同列させるのは、かつてないことであり、このことの意味は大きかった。要するに、「文革小組」の地位を今回の電報によって全国に知らせることができただけでなく、「文革小組」の地位を高めることもできた。毛沢東の「文革小組」に対する

態度に理解を示したのは周恩来である。周恩来は2月2日に陳伯達、江青並びに「文革小組」に手紙を送り、次のように提案した¹⁷⁾。

提案1、今後、毎週の月、水、金の夜10時から、釣魚台で打ち合わせ会議を開き、文革（小組）を中心にして、私が参加する。情勢や政策、そして関連する文書の草案などについて論議する。ほかの関係する同志は、論議される案件の性格によって、その都度に参加させる。

提案2、今後、毎週の火、木、土の午後3時半から、懷仁堂もしくは国务院で打ち合わせ会議を開き、党と政府のそれぞれの業務について論議する。4人の常務委員（周恩来、陳伯達、康生、李富春）を主として、副総理（陳毅、李先念、譚震林、聶榮臻、謝富治）および葉劍英も参加する。文革小組の江青同志もぜひとも参加してください。都合が悪い時には他の同志を指名して参加させてください。

以上の提案は「文革小組」および江青の地位が反映されていて、周恩来も「文革小組」の地位を高めることに積極的協力していたことが見て取ることができる。しかし、毛沢東の支持があったから、「文革小組」の地位や権威は高まったが、党内の幹部から「文革小組」への批判はおさまる気配がなかった。

三、京西賓館大騒動（軍事委員会拡大会議）

1967年1月19日から20日にかけて、中央軍事委員会拡大会議が開かれ、周恩来が奪権に関する毛沢東の談話内容を会議参加者に伝達した。その内容は次の通りである¹⁸⁾。

奪権に関しては、資本主義の道を歩む実権派やブルジョア的反動路線を堅持する頑迷分子から権力を奪いとると新聞の記事があったが、今のところ、相手がどっちの味方かを区別する必要がなく、まず、権力を奪取することが先決だ。形而上学的なやり方じゃダメなんだ。さもなければ、束縛されてしまう。どのような性質の実権派であるかを判断するのはこの運動の後期に任せよ。

つまり、この段階では、毛沢東が権力を奪取することを最優先の課題としていたと言える。それから、江青が全軍文革小組の顧問に就任したことにより、「文革小組」の軍への介入および影響力が強化されたと考えられる。しかし、中共中央文献研究室編纂の『周恩来年譜』にはこの部分の記述はない。それは、偶然のミスだろうか、それとも、わざと真実を隠そうとしているのか、恐らく後者であろう。なぜなら、いままでに「奪権」行動は江青をはじめとする「文革小組」が犯した犯罪行為だと断罪されたからである。目的は、毛沢東の責任を回避させることにある。

それ以前の1月11日に、毛沢東も出席した中央政治局会議では、文革中の軍の現状に対して、徐向前、葉劍英、朱徳が懸念を表明し、軍の安定を求めた¹⁹⁾。同日、中共中央、国務院、軍事委員会が各地の重要な部門に対して軍事的管理を実施し始め、各地の銀行を人民解放軍と公安部門によって保護するという共同通知を発した。さらに、翌日の1月12日、『闘争の切っ先を軍隊に向けないことに関する中共中央の通知』に毛沢東が賛成した。「この時、毛沢東の心情には相当矛盾がある。造反派の奪権行動によってもたらされた混乱を毛沢東がコントロールしようとし、これらの消極的な現象を解消しようとしたが、全体的には、毛沢東は造反派の奪権行動に対しては、依然として肯定し、支持していた。毛沢東は、軍隊に安定のための役割を果たさせることだけではなく、奪権する『左派』にも支持させることを望んでいる」²⁰⁾。

毛沢東の奪権指示は、造反派を大いに励まし、「奪権」行動をさらに助長した。軍事委員会拡大会議はこうした背景の下で開かれた。会議では、中国人民解放軍総政治部主任肖華の文革に対しての態度問題をめぐり、「文革小組」との対立のみならず、軍の長老の間でも激しい対立が生じた。すなわち、「京西賓館大騒動」（大開京西賓館）である。1月19日、会議で江青は軍における文革をそれほど展開していなかった責任が総政治部にありと指摘したうえで、総政治部主任・肖華が当日の夜に労働者スタジアムで行われる10万人集会で自己批判を行うべきだと要求した。軍事委員会副主席・葉劍英などは、その状況を毛沢東、周恩来に報告した。それに対し、毛沢東は肖華を保護すると指示した。翌日の会議では、江青が攻め続け、さらに、葉劍英と全軍文革小組組長・徐向前の間で激しい言い争いがあったり、互いがテーブルを叩いたりした²¹⁾という事態にまで発展した。いままでは、肖華のため、葉劍英が江青に向かってテーブルを叩いて怒りを爆発したという説がある。たとえば、『周恩来年譜』には「この会議は1月19日、20日に開かれ、主に軍隊における『4大』²²⁾を実施するかどうかについて討論することである。20日の会議で、葉劍英等の軍の長老たちは江青、陳伯達が肖華批判大会を実施するように企図したことに憤慨し、テーブルを叩いて江青などを非難した」²³⁾という内容であった。しかし、この内容も実際は政治上の考慮から改ざんされたものであり、つまりは、徐向前の「文革小組」への一時的な傾斜という不都合な真実を隠そうとしたものであった。また、一部の学者は、この京西賓館大騒動を「二月逆流」の一部としてみるが、会議の内容を分析した結果、「二月逆流」の誘因の一つであると捉えるのが妥当だと考えられる。その理由は、毛沢東は肖華を保護する指示と江青が肖華に自己批判を要求し続けたことは、二人羽織が演じられていた可能性があることを否定できない。つまり、毛沢東の保護指示は一種の罫とも考えられる。というのは、「文革小組」に反対する勢力を誘き出すためには、対立が必要だからである。

四、毛沢東の「文革小組」への批判

2月10日に、毛沢東が主宰して政治局常務委員会拡大会議を開き、当会議に参加したのは、

林彪、周恩来、陳伯達、康生、李富春、葉劍英、江青、王力である。

会議で、突然、毛沢東は陶鑄の失脚を問題にして、「文革小組」の陳伯達、江青を名指して厳しく非難した²⁴⁾。

陳伯達よ、お前は一人の政治局常務委員に過ぎないのに、他の政治局常務委員を打倒してしまった。これまで、お前は劉少奇と私の間に日和見主義を決め込んできた。お前と長年に渡って付き合ってきたが、お前は自分の利益と関わらなければ、俺のところ決して来やしない。

江青よ、お前は御大層な目標を持つが、能力もなく、志は高いのに才能がない。お前は自分のことしか考えていない。陶鑄打倒の問題はお前たち二人だけで仕組んだことであり、ほかの者には関係ないことだ。

過去と同じく、俺に報告せず、俺に対して情報を閉ざしている。唯一例外は総理だ。すべての重要な事項において、総理は必ず俺に報告する。

同時に毛沢東は生活会と称する陳伯達と江青を批判する会議を行うよう「文革小組」に指示したが、陳伯達と江青の問題は、決して外部で論議してはならず、「文革小組」の範囲で論議すると付け加えた。しかし、「この点については、全く守られなかった。葉劍英はすでに他の軍の長老に伝え、李富春も他の副総理に話したのである」²⁵⁾。文革の政策に意見を持つ人間は、その批判から毛沢東がいままで政策を改め、文革のやり方を変えるのではないかという期待感を持ったと考えられる。このような期待感も毛沢東が目論んだ効果であるかもしれない。さらに、毛沢東が主宰の常務委員会拡大会議に参加するメンバーを増やすことも決定され、毛沢東の提議で、5人の副総理（陳毅、譚震林、徐向前、李先念、謝富治）と4人の「文革小組」のメンバー（関鋒、戚本禹、張春橋、姚文元）、そして、林彪の妻葉群、総参謀長楊成武などが会議の新メンバーになった²⁶⁾。

この会議においては、いくつかの疑問点がある。すなわち、陳伯達と江青が陶鑄を失脚させることができるのか。なぜ、毛沢東が突然、陳伯達、江青を非難したのか。なぜ、常務委員会拡大会議のメンバーに國務院の副総理だけを補充させたのか。

周知の通り、中央上層部などの人事に関する任免権は毛沢東にある。陶鑄の失脚を決定したのは毛沢東ほかならない。それ以外の人間が毛沢東の同意または暗黙の了解を得ずに陶鑄を失脚させることはできない。陳伯達や江青達は陶鑄の失脚に対する権限を持ってはいなかった。

地方から中央の中枢にまで抜擢された陶鑄はいろいろな面において、毛沢東の「奪権」政策または意図に抵触した。たとえば、従来の体制や組織を破壊しようとした毛沢東が書記処や中央宣伝部といった機関を廃止すると強調したのにもかかわらず、陶鑄は書記処の権限を強化しようとし、宣伝部に側近を配置したりした。また、権力の中枢から外された劉少奇や

鄧小平に対する同情を持ったことや、革命と経済活動を両立させようとしたことは、革命を最優先な課題とする毛沢東の思惑に反していた。早くも1966年9月から、陶鑄に対する不満を現した。したがって、毛沢東は徹底的に「ブルジョア反動路線」への批判を行うように呼びかけた。その批判の主要な対象は陶鑄であった²⁷⁾。また、1966年11月10日、上海工人(労働者)革命造反総司令部が鉄道を占拠し、上海から北京に向かう列車を約20時間(30時間の説もある)にわたって停車させ、重要な交通動脈を麻痺させた「安亭事件」を起した。それに対し、陶鑄は混乱を抑えようとし、上海の造反派を支持しないという立場を取った。しかし、「安亭事件」によって引き起こされた混乱は、毛沢東の「天下大乱し、天下大治に至る」という考えに一致した。したがって、毛沢東にとっては、陶鑄が文革展開の邪魔者であり、排除しなければならない対象であった。そのため、毛沢東は陶鑄を批判する会議を開くよう命じた。批判会議は二回にわたって行われた。それは、1966年12月6日の政治局拡大会議と12月下旬に行われた「生活会」である。「生活会」では、陶鑄が劉少奇、鄧小平路線を堅持することを批判した²⁸⁾。したがって、陶鑄の失脚はただ時間の問題にすぎなかった²⁹⁾。

1967年1月4日に、江青の指示を受けて、陳伯達は陶鑄の問題を公にした。1月8日、毛沢東は中南海で会議を開き、「陶鑄の問題は非常に重大だし、非常に不正直だ」³⁰⁾と、「鄧小平の推薦で陶鑄を中央へ移動させた」ことを不満気に話した。さらに、「あなたたちが会議を開いて、陶鑄を攫みだせばよいであろう」³¹⁾と付け加えた。こうしたことから明らかに陶鑄の失脚は毛沢東によって決定されたのにもかかわらず、陶鑄の失脚に関する責任は陳伯達、江青にあるかのように毛沢東は彼らを非難した。もし、毛沢東が陶鑄を失脚させるつもりがなければ、陶鑄の権力を回復させればそれでよいことで、毛沢東にとってそのことはそれほど難しいことではなかったであろう。また、もし、陶鑄の失脚が陳伯達、江青の意志で決定したとすれば、毛沢東はその決定を覆すこともできただろう。なぜなら、毛沢東が中共中央の決定に対して最終的な決定権を持っていたからである。したがって、毛沢東の陳伯達、江青への批判の背後には他人に言えない秘密、または陰謀が隠されていると考えられる。つまり、このように「文革小組」のトップ二人である陳伯達、江青を非難したことには、反文革の人間を誘き出すことにあったと考えることが至当であろう。

さらに、常務委員会拡大会議のメンバー追加にも毛沢東の思惑が織り込まれていた。つまり、まだ、実権を握っている「国務」系統からの「奪権」であると考えられる。

現在、上述した毛沢東の陳伯達、江青への批判という事実を用いて、陶鑄の失脚は彼らの仕業であり、毛沢東と無関係のように説明する学者が少なくない。それは、毛沢東の批判の真意と歴史事実を誤解したものである。

五、「二月逆流」の経過

上述した毛沢東の指示を受けて、2月14日に陳伯達、江青を批判する会議を開いた。しかし、江青はこの日に病氣と称して会議を欠席し、批判の対象は陳伯達³²⁾のみだった。しかも、「文

革小組」の内部で行われたので、批判会議は簡単に済まされた。

状況を一変させたのは2月16日に中南海懷仁堂で行われた政治局日常工作会議であった。上述したように会議の前に、李富春は毛沢東の陳伯達、江青への批判の内容を國務院副総理に伝えた。なぜか、江青はまたも欠席した。その原因はいまだに明らかではないが、このことは、今後の研究での一課題とすべきである。

会議をはじめると、「張春橋同志は、上海の課長以上の幹部が全部打倒されたと言うが、いったい彼らはどんな罪を犯したのでしょうか。これらのものすべてが裏切り者、特務、走資派だとでも言うのですか。陳丕顯同志は幼い頃から革命に参加しているのです。なんの問題があると言うのですか？多くの省党委員会の書記にいったいどんな問題があり、どうして北京に来させないのでしょうか³³⁾と譚震林が張春橋に問い詰めた。「言ったでしょう。大衆が承認しないのです」と張春橋が返事した。その返事を聞いて、「君らの目的は老幹部をなき者にしようというのだらう³⁴⁾と譚震林は興奮して反論した。互いに譲らない状況の中で、譚震林の口調が激しくなり、最後に爆弾的な発言をした。「俺は65歳まで生きるべきではなかった（その年、譚の年齢は67歳だった—引用者注）、革命に参加すべきではなかった、この40年間、毛主席と一緒に革命を行うべきではなかった³⁵⁾と言って、会場を後にしようとした。周恩来は「戻ってこい、お前は無礼だ」と厳しく叱責した。陳毅も「退場しないで、ここで、彼らと戦おうぜ」と譚震林の退場を止めようとした。

この陳毅の発言は毛沢東の神経を尖らせた。「こういう連中が政権をとると修正主義をやった。延安のころ、劉少奇、鄧小平、彭真、それに薄一波、劉瀾濤、安子文などは、毛沢東思想を最も熱烈に擁護していた。彼らは毛主席に逆らったことがなく、じつは、毛主席に会ったことすらなかった。毛主席に逆らい、その結果批判されたのは我々だ。総理は批判されなかったか？毛主席に逆らったのが誰か、歴史が証明しなかったか？これは未来が再び証明してくれるだろう。スターリンはフルシチョフに後を譲り、フルシチョフは政権をとると修正主義をやったのではなかったか³⁶⁾。

会議は約3時間以上にも及び、長老たちの不満が次から次へと噴出した。会議の終了後、張春橋と姚文元がすぐ江青に報告した。「これは劉少奇ブルジョア反動路線を粉砕した後、わが党に出現した新たな、そして重体な路線闘争である。譚震林、陳毅、葉劍英がこの誤った路線の総代表であり……³⁷⁾と江青は会議の状況を路線闘争であると断定し、王力、張春橋、姚文元に直ちに毛沢東に報告するよう指示した³⁸⁾。

報告を受けた毛沢東は、2月18日深夜に自宅で会議を招集し、「文革小組」を批判した國務院や軍の高級幹部の行動を「反革命的復活の逆流」であると厳しく糾弾した³⁹⁾。

誰かが中央文革に反対するなら、俺はその人に反対するぞ。お前らは、王明、張国燾を呼び戻してもいいぞ。俺は林彪同志と一緒に葉群を連れて南方に行く。江青同志をお前らに残し、お前らは江青同志の頭を切ってもいいぞ、また、康生同志を流刑にしても構

わん。

毛沢東が、陳毅、譚震林、徐向前に「反省」を促す一方、彼らに対する批判会議の開催もその場で決定された。そのため、2月25日から3月18日にかけて7回にわたって、周恩来が主宰の政治局委員や「文革小組」のメンバーによる批判会議を開き、陳毅などを厳しく糾弾した。李富春、謝富治を除いて、多かれ少なかれ、殆どの國務院副総理クラスの間人間が批判される対象になった。

さらに、社会において、北京市革命的労働者・職員代表会議が開催され、「ブルジョア反動路線の新たな反攻を徹底的に撃退し、資本主義の反革命的復活の逆流に手痛い打撃をあたえ、プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめる」⁴⁰⁾と宣誓した。このことから「二月逆流」への反撃が中共内部から社会に拡大したと言える。また、「文革小組」に限った2月14日の陳伯達などへの批判会議と比較すれば、陳毅などが直面していた批判会議は非常に厳しかったことが明らかである。

葉剣英、徐向前、聶榮臻、李先念、陳毅など「二月逆流」の関係者への周恩来批判も厳しい内容であった⁴¹⁾。

- 1) 聶榮臻は一貫して独立王国の形成に熱心である。かつて、晋察冀にいた頃、いい戦いは一つもなかった。
- 2) 「95」命令には、軍の大学における上京して大連合することが禁止されるという規定がある。それは、徐向前が作りだしたものである。
- 3) 「私の反省書は圧力によって書かせられたものである」と陳毅が言っている。
- 4) 葉剣英は娘が軍事機関を包囲したことを知っていた。
- 5) 葉剣英は「中央文革が古参幹部を助けまい」と愚痴をこぼした。
- 6) 1967年1月の軍事委員会拡大会議で、徐向前が発言する時に一分間で20回もテーブルを叩いた。葉剣英は指骨折するまでに叩いた。
- 7) 楊勇が葉、徐に迫害され行方不明になった。
- 8) 軍事委員会で「軍の擁護に関する規定八条」を論議する際、葉剣英が文革のメンバーと口論した（「舌戦群儒」）。
- 9) 聶榮臻が「高級幹部の子弟に対して、教育なしで処罰する」と言った。
- 10) 葉剣英はある会議で、「昔、戦士の負傷は戦傷であるから光栄に思うが、今回の文革では、戦士の負傷は罵りである」。(暗に江青同志の「文攻武衛」の影響を指す)。その発言に対して李先念が良いことを言ってくれたと煽てあげた。
- 11) 邱会作が徐向前に殴られて怪我をし、吊し上げられたが、幸いに林副主席に救出された。
- 12) 葉剣英は羅瑞卿にまだ情があるが、毛主席には少しの感情も持っていない。

以上の内容から、周恩来の態度を伺うことができる。また、軍の長老たちに対しての批判は非常に厳しかったことが明らかである。つまり、「二月逆流」において、「周恩来は国務院と解放軍の戦友を支持しなかった」⁴²⁾。毛沢東の権力に完全に屈服したといえよう。しかし、今でも多くの文革の関連書籍に周恩来の態度について、わざと避けるという手段を選択している。というのは、周恩来のイメージは共産党と密に関係しているため、この偶像を壊してはならないからである。

「二月逆流」への反撃を通じて、「文革小組」が中央政治局に取って代わり、「軍事弁事小組」が軍事委員会に取って代わった。本来、周恩来が主宰していた中央打ち合わせ会議も「文革小組」打ち合わせ会議に取って代わられた⁴³⁾。したがって、「二月逆流」の批判は「文革小組」の地位を向上させる手段の一つであると言えるだろう⁴⁴⁾。

六、終りに

1967年、文革における全面的な階級闘争の展開において、最優先な任務として「奪権」は全国各地に広がり、「一月革命」によって短期間で既存の体制や秩序や組織を打ち砕き、地方政府の形態も変わった。文革の前後に、「党務」系統の主要な関係者は毛沢東に粛清され、「文革小組」が中央書記処に取って替わった。したがって、従来の「党務」系統が打ち砕かれた。

一方、紅衛兵組織や造反組織は、「奪権」の指示の下で、「国務」や「軍務」系統に圧力をかけた。それに対して、「国務」や「軍務」系統の一部長老は、毛沢東の「奪権」に対して不満をもち、その不満が直接に「文革小組」への批判に変わった。しかし、「文革小組」は毛沢東の手先機関であり、文革の展開には欠かせない存在であるため、反「文革小組」行為は当然反毛沢東行為とみなされた。

「二月逆流」の発生の原因は、「国務」や「軍務」系統の長老たちと「文革小組」の対立にあった。結果的には、批判の対象が「文革小組」から毛沢東に変わった。譚震林、陳毅の発言は毛沢東を照準にした。「二月逆流」の誘因は毛沢東の陳伯達と江青への批判にあった。古参幹部の懐仁堂騒動について「私が『文革小組』への批判という東風に乗じた」⁴⁵⁾と毛沢東が述べた。これはいつか、どこでの発言か不明であるが、その狙いは明白である。つまり、毛沢東は自身で決めた陶鑄の失脚を問題にして、陳伯達などを批判し、彼らへの批判会議を開くことによって、これまでの政策を変えると長老たちに錯覚を与えた。その錯覚から長老たちは「文革小組」に攻撃を加えた。それによってもたらされた結果は、毛沢東の反撃と国務院の運営が麻痺状態に追い込まれてしまったことである⁴⁶⁾。国務院における本来の機能の麻痺という結果は、文革初期における毛沢東の思想と一致したといえよう。また、分析した結果、毛沢東の陳伯達や江青への批判は単なる茶番劇に過ぎなかった。その狙いは、文革に不満を持つ党内における隠れた抵抗勢力を焙り出すことにあった。同時に、「二月逆流」に反撃を加えたことによって、「文革小組」の政治的な地位を強化させたと言える。

注

- 1) 王力『王力反思録』香港北星出版社 2008年刊, p.572を参照。
- 2) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』台湾時報出版社1994年刊, p.366。
- 3) 1971年11月14日, 毛沢東は成都地区の座談会に出席した際の談話である。「二度と『二月逆流』を言わないでくれ, この事件の本質は軍の幹部たちが林彪, 陳伯達, 王(力), 関(鋒), 戚(本禹)に反対することであった」と毛沢東が言っている。
中共中央文献研究室編『周恩来年譜』, 中共中央文献出版, 1997年5月刊, p.495。
- 4) 前掲書, 王力, p.649を参照。
- 5) 中国人民解放军国防大学『文化大革命研究資料』上巻, p.199。
- 6) 前掲書, 王力, p.652を参照。
- 7) 前掲書, 王力, p.533を参照。
- 8) 前掲書, 中国人民解放军国防大学, p.251-253。
- 9) 前掲書, 王力, p.534を参照。
- 10) 前掲書, 中国人民解放军国防大学, pp.268-272を参照。
- 11) 前掲書, 王力, p.656。
- 12) 実は, 最初の「奪権」を行ったのが, 山西省で, その次に山東省, 貴州省, 黒竜江省という順番となっている。上海はそれらの地域の後に成功したのである。
- 13) 何蜀「毛沢東製造的文革样板“上海一月革命”」『華夏文摘増刊—文革博物館通訊』(129)を参照
<http://museums.cnd.org/CR/ZK02/cr129.hz8.html#3>
- 14) 現在の市人民政府相当。
- 15) 前掲書, 中国人民解放军国防大学, p.273。
- 16) 前掲書, 王力, p.530。
- 17) 張萬舒『狂熱的年代—1966-1976年紅色的大陸』香港天地圖書 2012年7月刊, p.132。
- 18) 前掲書, 王力, p.540。なお, 『王力反思録』には, 周恩来が毛沢東の指示を軍事委員会拡大会議で伝えたのは1月21日となっているが, それは記憶ミスであると考えられる。
- 19) 中共中央文献研究室編『毛沢東傳』第6巻, 香港中和出版社, 2011年刊, p.167を参照。
- 20) 前掲書, p.168。高文謙『晩年周恩来』明鏡出版社, 2003年刊, p.197を参照。
- 21) 丁凱文, 司馬清揚『找尋真实的林彪』中国文革歴史出版社, 2011年刊, pp.329-330を参照。
- 22) 「四大」とは, 大いに意見を出す(大鳴), 大いに討論する(大放) 壁新聞(大字報), 大弁論のことである。
- 23) 前掲書, 中共中央文献研究室, p.115。
- 24) 前掲書, 王力, p.656-657。尹家民『紅牆知情録』(一)当代中国出版社, 2010年1月刊, p.163。
- 25) 前掲書, 王力, p.657。
- 26) 前掲書, 王力, p.657を参照。
- 27) 前掲書, 王力, p.432を参照。
- 28) 前掲書, 王力, p.442-447を参照。
- 29) 日吉秀松「傳記華国鋒, 天方夜譚」(香港)『開放』2009年5期 p.6-7を参照。
- 30) 前掲書, 王力, p.447。
- 31) 前掲書, 王力, p.447。
- 32) 毛沢東の真意を知らなかった陳伯達が批判会議の前に, 自殺しようとした。覚員として, 自

殺すれば、党を裏切る行為と思われるため、世界各国の自殺した共産党員の記事を調べたと
いわれている。

- 33) 紀希晨 趙峻防 (立花丈平・斎藤匡史訳)『二月逆流「中国文革大革命」1967年』時事通信社,
1988年刊, p.216。
- 34) 前掲書, 紀希晨 趙峻防, p.217。
- 35) 00500001010A 蔣経国総統ファイルより 台湾国史館
- 36) R・マクファーカー『毛沢東最後の革命』(上) 青灯社 2010年刊, p.278。
- 37) 前掲書, 紀希晨 趙峻防, p.225。
- 38) 前掲書, 王力, p.661を参照。
- 39) 前掲書, 台湾国史館
- 40) 『北京週報』1967年第14期, p.6。
- 41) 前掲書, 台湾国史館
- 42) 前掲書, R・マクファーカー p.278。
- 43) 前掲書, 『周恩来年譜』, p.130を参照。
- 44) 前掲書, 尹家民, p.165を参照。
- 45) 紀希晨編『汪東興回憶：文革十年記事』中国文史出版社, 2007年刊, p.126
- 46) 前掲書, 王力, p.510を参照。